

今日の日本 明日の世界



Vol.33
貧富格差問題の答えは
歴史の中にある

1. 1%が握る80%の富、それでも 社会の安定は可能

今世界で貧富の格差が拡がりつつあるとの指摘がなされています。英国の国際協力団体オックスファムは、2017年に世界で生み出された富の82%を最も豊かな1%が所有し、逆に世界の人口の半分を占める37億人の貧困層の富は1%にも満たなかった、との報告書を発表し世界に衝撃を与えました。
GAF A(グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップル)に代表される、

で、消費を最小限に抑える指向でしょうし、シェアは持てる資産で最大限により豊かな生活を送るための知恵でしょう。

となると、江戸時代の長屋や村で行われていたコミュニティを核とする共同による満足生活と共通するものが多いと感じるのです。ただ、現在はITの発展により、コミュニティがインターネットの中で作られる分、より共同・協力によって生まれる効率性が増していると思いません。

今後も貧富の格差が大きく存在すればするほど、こうしたエコ経済やシェアリングやサブスクリプションと呼ばれる定額制のサービスは拡大が見込まれ、ビジネスチャンスが潜んでいると思われれます。

3. 富の再分配にもチャンス、日本の 工芸にも注目

先に例に出したGAF Aのような流れに乗り遅れた国にも、世界の富を集積させるビジネスチャンスはまだあります。お金は天下の回り物です。集積された富の次の流れを狙っていけば大きなビジネスへの成長が期待できます。

かつての繁栄国に残されたものには豪華な建造物として世界遺産に登録されているものが数多くあります。集中した富は、それを見せびらかして自分の権威を高めようとする場合が多いです。但し過去にはそれが富

ITの技術革新で大きな社会変革が起きて、新たにできあがったIT関連サービス市場の場合、より広いネットワークを持つている企業のものが多いなどの理由で1社に独占される事態があちこちで起こっていることが、大富豪を生み出す原動力になっている面は否めません。

しかし歴史を振り返ってみれば、そのようなことは何度も起きていることです。新たな先端の武器や豊かな鉱山などの領地を持ったところに世界の富が集中するのは、古代ローマや古代中国から最近の大英帝国まで変わっていないように思います。但し、その勢いで国が伸びているときは良いのですが、一旦その歩みを止めたにも拘わらず、過去の栄光を維持しようとする世界から集まるお金の流入が細まっているため、借金や税の徴収などで無理を図ることになり、国を滅ぼす内部からの反乱や革命が起きる場合が多かったのです。

現代でも、そうした反乱の勃発に対する懸念を警告する向きがありますが、当面はIT社会がAIなどの飛躍的進化に支えられて、拡大の道を歩むことが明白なので、今申し上げた無理な資金の徴収は行われる確率が低いでしょう。結果、反乱の勃発はないでしょう。

の集中の衰退期に起きるケースもあり、ベルサイユ宮殿に代表されるように、革命によって政権が崩壊しました。

一方、イギリスでの活発な慈善事業に代表されるように、革命が起きずに継続した権力は必ず庶民に対する還流策を講じている場合が多く見受けられます。現在も貧富の格差が開いており、さらなる拡大も懸念されている訳ですから、富める者から貧しい者への資金還流は起こす必要があるでしょうし、起きると思いません。今でもインターネットを通じて自分の夢実現に資金を募るクラウドファンディングのシステムなど小規模なものがありますが、今後この還流のシステムをIT上のプラットフォームホームとして構築できた者は、世界の富の何割かの移動に携わることになるのですから、大きなビジネスとなるでしょう。

往時は豪華な建物以外にも宝飾品にも富は流れていきました。これからも贅沢品の取り扱いがビッグビジネスになる可能性を持っています。具体的には贅沢品として確立しているブランドです。ブランド品の供給力には限界があるので、新たな投資対象となるブランドが求められていくことになるでしょう。例えば、何百万円、何千万円する人気の高級時計は今や10年待ち20年待ちの状態になつていて聞きます。これでは富を持つ人々の顕示欲は満たされませ

2. 低所得者の楽しみもITが産み出す

これからは、格差のついた、より低所得層の人々がどうやって日々の生活に満足していくかが、社会を安定的に運営するためにも重要になってきます。歴史を見ると低所得層の人々は最低限の生活保障がされる限り、その平和な生活を守ろうとする方向に向かう傾向があるように思えてなりません。富の配分が支配者に偏ったとしても、庶民はコミュニティを構築して、一人一人の弱い力を結集することで、より満足度の高い生活を送ってきました。

今より物量的豊かさが劣っていた江戸時代も今残された大名庭園をみると、現在と変わらぬ「1%に8割の富」に近い貧富の格差が存在したと推測できます。当時の町民の住居、長屋を考えると、消費を効率的に低く抑えるため、何でも貸し借りする文化が生まれました。農業地帯でも大切な牛や馬を共有し、最大限効率的に作業がなされていきました。そうなるコミュニティから弾き出されれば村八分で、生活が一気に苦しくなるため、現行秩序に従順になることで、保守化するのだと思います。

この流れを貧富の格差が開いていると言われる現代に当てはめると、エコとシェアがキーワードとして浮かび上がって来ると思えます。エコはできるだけ自己所有を減らすこと、

ん。何れ別のブランド商品が台頭してくるようには私は考えていません。その場合は、できるだけ他と区別されるものがよい訳ですから、美術品や工芸品にも光が当たることになるでしょう。明治の初期欧米の万国博で賞賛を浴びた七宝や陶磁器などの我が国の工芸品が、かつてと同様外国人の手によって、再び脚光を浴びることになるでしょう。

濱田 敏彰

Toshiaki Hamada

1955年大阪市福島生まれの東京日本橋育ち。東京大学法学部を卒業し、大蔵省(現財務省)に入省。政府経済見通しの作成に始まり、銀行検査官、税務署長、大阪税関長、大臣官房審議官、他省への出向ではジェトロコペンハーゲン事務所長、地方分権推進委員会事務局参事官、東日本大震災の際には消防庁審議官を経験。2015年税務大学校長を締めずに退官し、現在は経済評論家、関西大学客員教授。

